

宗教と「企業文化」

サッチャー時代（一九七九年～九〇年）の英国の体験⁽¹⁾

リチャード・H・ロバーツ

藤田尚則 訳

はじめに

「経済学は手段である。その目的は精神の変革にある⁽²⁾」。
マーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher) のこの言葉は、（一連の社会経済政策措置として理解される）サッチャリズムと、いわゆる「企業文化」（構造転換した社会の理念的な将来の状態の縮図）との関係を、独特の率直な言い方で示したものである。サッチャー政権時代（一九七九年～九〇年）、社会経済的な「英国の実験⁽³⁾」は、「新生英国⁽⁴⁾」を創造する目的で着手された。一九七九年五月



の選挙で保守党が勝利をおさめた後に導入された、明らかに漸次的な一連の措置は、個人の「精神」の転換を含んだ、より大胆なイデオロギー的、文化的野望と要求を具体化した首尾一貫した計画の形態をとるようになった。実際、サッチャーが主宰した行政の最終目標は、国家の復興、「強力かつ自由な英国⁽⁶⁾」の再建にはかならないものとなっていたのである。したがって、本稿で論ずる時代は、多くの点で特異な時代であったと言わざるをえない。

サッチャー時代と「企業文化」を、境界が曖昧な宗教、

経済および政治といった視点からあえて考察することは、不都合にみえるかもしれない。しかし、しだいに明らかになるであろうが、実際はその逆なのである。⁽⁷⁾一九七九年から九〇年にかけて、「宗教」は予想外に人目を引くようになった。というのも、一方ではサッチャリズムの社会経済的、イデオロギー的指導力が増大する中で、他方では「企業文化」や労働党の相対的弱さと混乱の中で、宗教が、二者択一的な公的論議にとつての源泉の一つとなつていったからである。英国における宗教の復興は、確定しにくいほど大きな転換的效果をもつたものとして理解されるだろう。それは、ある意味で、革命前の元ドイッ民主主義共和国や東欧諸国で宗教団体が果たした役割やその社会的立場に類似している。それらは、一九八九年から九〇年にかけての出来事の先鞭をつけたのである。「宗教的 (religious)」と「宗教 (religion)」という用語を用いる場合には、慎重に区別しなければならぬ。

本稿では、「宗教」という用語を三つのレベルでとらえる。第一に、サッチャー政権時代、全体としては信仰

在しているのである。

「サッチャリズム」および「企業文化」という基本的概念の定義や文脈の分析を行う前に、サッチャリズムに過度に見られる非実際性やレトリックについて簡単に述べよう。

一、「資本主義の勝利」——サッチャリズムにおける過度なレトリックと精神性

サッチャー政権の終わり頃、指導的な敵対者たちは、勝利主義的レトリックで表された遠大で国家的な、また世界的ですらある望みを抱き始めた。そして、そのレトリックは、一九八九年末の革命的出来事の直後に、最も耳ざわりなものとなったのである。皮肉にも、これはまた、国家的な転換期に生じた。その時期は、それまでの十年間に英国で行われた遠大な社会的、経済的および政治的措置の意図的な、また非意図的な諸結果が、突然、それらを鼓舞し駆り立ててきた幻影の信頼性を破壊し始めた時期である。

一九九〇年二月二十七日、IOD総裁ピーター・モー

人口が減ったにもかかわらず、政治生活や公的論議に宗教的要因がふたたび入り込んだことが認められる。この点に関して、デービッド・マーティン (David Martin) は、「英国において、一九八九年初頭にマスコミに接した人はだれでも、一般の人々の宗教への信仰や活動が極めて減ってきているのとは対照的に、宗教に関するニュースが極めて増加していることに衝撃を受けたであろう」と述べている。第二に、サッチャリズムの時代と企業文化の特徴には、宗教的および神学的概念とカテゴリーを、現実的意味と比喩的意味において用いる分析を促すような特徴がある。われわれは、これらを、サッチャリズムと企業文化の疑似宗教的特徴と呼んでいる。第三に、理念と社会現象に特有な核心が存在することが論議されるべきであるが、それは「企業宗教 (enterprise religion)」そのものと呼ばれうるであろう。「ニューエイジ」の様相を呈している) こうした宗教意識は、企業文化の前縁で働く個人および集団の重なりあつたネットワークによって共有されるが、なお主として英国の主要なキリスト教教団やその他の宗教団体の制度化された機構の外側に存

ガン卿 (Sir Peter Morgan) は、IODの年次例会で演説し、次のように主張した。すなわち、「本大会が計画されて以来、東欧では革命が起きてきた。市場経済は勝利したのだ」と。ピーター卿は、市場経済と「企業文化」についての普遍的な要求を釈明することなく力説し、まだそれらに反対しようとする人々を攻撃したのである。というのは、彼は、「企業文化とは、すべての個人が、世界は彼または彼女に生活の義務を負つてはいないと理解している文化である。そうであるからこそ、われわれは共に活動し、すべての人は、英国のPLCの成功のために働いているのである」と、述べている。⁽¹⁰⁾

モーガン卿にしたがえば、企業文化とは、「旗艦」(成功した会社)、「英雄」(先導する指揮官)および「誇り」(生産物)をもつたものである。したがって、全国民は、非戦闘員が存在しないグローバルな経済戦争に閉じ込められていると考えられたのである。しかしながら、全国民を「経済戦士」として教育するには、三つの障害があつた。すなわち、「支配層の意向」(富の創出を軽蔑し、富の分配を称賛した主教たちによって集約的に示される)、「中産

階級のサラリーマン」(教室、演壇およびメディアで「リベラル・エスタブリッシュメント」を繰り返す、教育を受けてはいるが遊歴する人々)、および「浮浪労働者層」(何ももたず、また、寄生的依存以外には社会において利害関係をもたない残り四〇%の人々)がそれである。実際、非常に忌み嫌われた「依存文化」の静態的な消極性は、「企業」の動態的な徳に対する、鏡の像のようなものであった。

モーガン卿の理論体系は、貧困な社会学であったにもかかわらず、新たな英雄的な指導階級 (classe dirigeante) の陰謀的懷疑をうまく説明している。その指導階級は、自らが社会のあらゆる階級に与えられる利益の無力と無感動に直面していると認めている。したがって、ピーター卿は、説得しようしたのではなく、主張したのである。彼は、累積的議論や帰納法を通して訴えたのではない。流行遅れの依存という信用されない過去にとって代わる、新たな力強い決まり文句を提議したのである。残されたことは、社会全体に——実際には世界に——新秩序を構築するために、最後の行動を起こすことであった。モーガン卿の演説は、今や誇張し過ぎた言行、皮肉に満

ちた傲慢な宣言と思われる。しかし、そうしたスタイルはその時代を十分表現しているものである。

ジョン・ラバン (Jonathan Raban) は、スコットランド教会総会でのサッチャーの演説は、モーガン卿の話し方と変わらぬものだ指摘している。すなわち、「妨げるもののない行動と妨げるもののない言葉に言い換えられた、力あふれる言い回し。説得力ある論議に伴う計略のすべてが失われているために、譲歩のない言い回し」と批評しているのである。その後、モーガン卿の演説が、政府部内での驚くべき急速な信用失墜をもたらしたことは、意外なことではない。政府は、圧倒的過半数の支持を得ていたにもかかわらず、一九九〇年十一月のサッチャーの辞任へと動いたのである。デニス・カーバナ (Dennis Kavanagh) は「政治家はレトリックによって生きている」と述べているが、後から考えると、政治家はレトリックによって死ぬとも言えるだろう。

新首相ジョン・メージャー (John Major) とカンタベリー大主教ジョージ・キャリー (George Carey) は、独力で地位を確保してきた貧しい身分の出身者であるため、

より温和なイメージを養わなければならなかった。⁽¹⁵⁾ しかしながら、サッチャーの辞任以来、さまざまな政治的、経済的危機が生じてきている。とりわけ、有名なコミュニティ・チャージあるいは人頭税は、権力の濫用を象徴するものとなった。それらに加えて、当初は、外交政策や経済政策を同時に再画定しようとしたメージャー新首相の努力が混乱したものであったという問題点もあった。⁽¹⁶⁾ 一九九〇年末と一九九一年初頭、サッチャー時代の「経済的奇跡」は突然しばみ、消失した。というのも、広範囲にわたる景気後退が、伝統的な企業経済や業績を誇っていた小事業に打撃を与えただけでなく、産業と労働の合理化を行った初期サッチャー政権の下ですでに大いに減退していた財政領域と製造業の基盤にも打撃を与えたからである。

この重大局面は、サッチャー政権下で一時的に影をひそめていた長期にわたる経済的衰退を、ふたたび表面化させることになった。⁽¹⁷⁾ こうした状況の下で、サッチャリズムと企業文化の、普遍的かつ全体主義的な大望は失われたかに思われた。企業文化が形成されなかった結果、

英国の政策は次第に派閥主義になっていった。こうした総括は、まだしばらくは評価されるべきではないサッチャー政権の長期にわたる社会的成果について誤解を与え、るかもしれない。サッチャリズムのレトリックは、今やサッチャーが権力の座から退いたことによって放棄されてきている。しかし、多くの政策は、経営上および行政上の手段によって存続しているのである。現在、こうした傾向は、イデオロギー的には、「人権」を消費者の権利に言い換えたいわゆる市民憲章 (Citizen's Charter) に具現化されているような、説得力に欠ける (しかし、そう複雑な) 「メジャリズム (Majorism)」を政治的に正当化することによって補強されている。

サッチャリズムの公的なレトリックと企業文化が失墜したことは、伝統的階級に与えられていた社会的権力を取り除くことになった。事実、変革をめぐる論議は、現在あまりなされていない。主要な宗教団体は、市場経済 (すなわち資本主義) や新たな領域への継続的拡大についての理論および社会的現実に対して、発展的な態度をとっていない。そのため、政治への宗教の関わりは、それ

に応じて減退してきているのである。

二、いくつかの定義——「サッチャリズム」と「企業文化」

サッチャリズムと企業文化は、親密に関連してはいるけれども、同一のものではない。本稿では、サッチャリズムは企業文化という理念的、将来的な社会文化的目標についての経済的、公的政策の基礎として考えられる。けれども、両者は共に、社会の変容過程で、相互に関連する両側面として存在したのである。サッチャリズムは、自由市場の拡大のために立案された総合的計画であり、全消費者の「自由」と「選択」を高め、「依存の文化」を払拭し、資本主義的な「自立した個人」の企業家活動を解放するためのものであった。それゆえ、サッチャリズムは、企業文化の不可欠な条件として、また、「精神」の内的変革を伴う、外面的で目に見える計画として理解されるのである。企業文化は、いっそう抽象的で「内的面的な」レベルで、すべての大衆の自己認識、態度および行為を永続的に変化させようとした。すなわち、それ

は、国家のおよび国際的規模で考えられる社会文化的な巧みな計画を含んでいたのである。「企業文化」自体が、その成立に必要な条件であるサッチャー的な概念から分離できるものであるかどうかという問題は、引き続き重要性をもっている。

a サッチャリズムの構成要素

「サッチャリズム」の定義は、明確ではない。というのは、カーバナが論じるように、それは、マーガレット・サッチャーの個人的信念や目標も指すし、一連の社会政策も指すからであり、同様に、もともと英国で正当化された政策を国際的に適用したものをも指すからである。近年の英国政治においては前例のないほど、一個人の個人的信念が政府やその政策を支配した。サッチャー自身、そのことを非常に簡潔に述べている。すなわち、「私は、彼女（彼女の見解を適用する外国人）に、サッチャリズムとは私よりずっと古いものであると言いたい。それは、基本的な常識、政府権力の制約に基づいており、政府の活動の成果を人々に与えるものである。そうすることに

よって、サッチャリズムは有効に機能するのである⁽¹⁹⁾と。

より広く考察した場合、サッチャリズムは、さまざまな政治的立場から十分に検証されてきた独自の歴史と発展をもっている⁽²⁰⁾。その源泉は、英国の保守主義内での複雑な転換過程にあり、そこでは、サッチャリズムは、新右翼の思想の強力な影響の支配下に入ったのであった⁽²¹⁾。サッチャリズムの成立は、まだ十分に検証されてはいないが、注目すべき伝達過程に関わっていた。それによって、新右翼の私立的「シンクタンク」⁽²²⁾から引き出された一連の社会政策が、次第に公務員による立法案となった。それらの法案は、議会の（儀礼的罵詈雑言も同然の）厳しい評価基準の下で検討され、その後法律として制定されたのである。

首尾一貫した政治的信条として理解されるサッチャリズムは、以下のように要約されるだろう。

①永続的な善を行うための政府の制限的機能、また、損害を及ぼすための政府の強大な機能、②個人の責任への重大な圧迫と、正義と不正の存在、③適切な国土の防衛を確保ならしめ、国際法および秩序を保持するとい

う一定の「基本的任務」を履行することが可能な強力な国家の存在⁽²³⁾、④個人の問題は、中央であろうと地方であろうと、政府に訴えるよりも家族関係の中で（もし可能とあらば隣人への訴えによって）自ら解決すること、⑤対応する経済成長の伴わない公的支出の増大、増税、そしてそれによって生ずる消費力に現れる「選択」の現象を認める、厳しい財政規律、⑥市場は、経済成長および自由選択を促進し、個人の自由を守る最善の手段であるということ、⑦訴える手段が借用またはインフレーションに對して設けられていない限り、一方のサービスに対するより大きな支出は、通例地方のサービスへのより少ない支出を意味するとの確信、⑧弱者、病人および失業者のために政府が介入することは、減速する社会の変化する世界の中での適合能力の点からみると有害であるという信念⁽²⁴⁾、⑨引き続き拡大する産業および公益事業の「私有化」、事実上あらゆる人間生活領域の市場化（すなわち商品化）、である。

サッチャリズムは、すでに経済的および社会政治的政策と実践についてみてきたように、本稿が取り上げる時

期に信頼と明快さを獲得した。しかし、それが理想として予期する目標は、いわゆる「企業文化」によって象徴されていた。「企業文化」の核心をなすものは、道徳的に妨げられない活動と富の創造の賞賛に基づいて達成される、個人的および社会的復興という、独特の展望である。貪欲という罪の意識から自由なこうした信念は、ある人々にとっては、基本的メタノイア、つまり帰納法的合理性に基づいては生じえない改宗なくては達成されないことがわかった。実際、ラーバン (Jonathan Raban) がサッチャリズムについて書いているように、「サッチャーの支持者」であるということは、「マーガレット・サッチャー自身の言葉でいえば、自己啓示を体験し、宗教的変容を経験すること」⁽²⁵⁾なのである。

「改宗」を求めるような、サッチャリズムの疑似宗教的性格は、戦後の英国政治の中で具現化された説得という慣例方式を避けた、信念のレトリックの核心的部分である。サッチャリズムは、その支持者たちに、長年にわたるセンサス・コミュニティ (sensu communis) とバツツカリズム (Butsellism)⁽²⁶⁾との関係を断たせ、より高度な

目標の名の下に政治的負担を迫るのに十分な信念を求めるイデオロギであった。それに付随して、強要された政策と、現実の社会的情況との間に衝突が起こる。市場化によって生ずる困窮は、望ましいものではないが、企業文化の盛大な晩餐会のためには (料理のために)「卵を割る」ことが必要のように、必要なものである。

おそらく、サッチャー時代以前と以後の最も根本的な相違点は、完全雇用が望ましいという信念の拒絶、労働力予備軍としての失業者の明白な容認、そして社会層における新たな配列、すなわち「下層階級」の暗黙の容認であろう。消費者の諸権利からなる市民憲章の公布 (と、それに関連した、ヨーロッパ社会憲章の拒否) は、實際上、依存状態にある人々から権利を奪い、彼らを疎外する。

ある面から見れば、サッチャリズムは、私利追求を是認し、それを道徳的な躊躇から解放したといえる。また、他の面から見れば、市場の影響と機能の領域を復興し、拡大するために、労働組合法の改正、鉄鋼、運賃、バス輸送、ガス、水道、電気の私有化、企業地域計画、公営住宅の売却および教育、保健、福祉、自治体サービスへ

の市場導入などの多くの施策をとらなければならなかった。「改革」は執拗に行われ、しばしば冷酷で党派的な熱意をもって行われた。しかし、その改革は、人口過剰の小国内ではほとんどなしえないものであることが判明した。企業文化についてのサッチャー派の理念の正しさを確信し続ける道徳意識の強い人々には、信じようとする辛抱強い意志が求められた。人々は、企業文化の創造という究極的な目標を達成するためには、一時的な不平等な結果が正当化されるということを、受け入れなければならなかったのである。

b 企業文化

「企業文化」は、まず第一に、ゆるやかに関連する一連の諸価値として最もよく理解されるだろう。新たな政治秩序の主要な考察者の一人であるヤング卿 (Lord Young) は、一九八九年九月の基調演説の中で、企業文化を要約して、「責任、イニシアチブ、競争と冒険、および経営努力という徳」について語っている。⁽²⁷⁾このようなヤング卿の、道徳的に解釈した企業文化の概念は、悪

名高いサッチャリズムの通俗的な原型とは矛盾するものであった。サッチャリズムは、一九八〇年代のイギリスのメディア (と道路) を闊歩した、道徳とは無関係の上昇志向の「ヤッピー」と、のろまな労働階級「ロードアマニー (Loadsamoney)」⁽²⁸⁾のものと考えられていたのであった。ヤング卿のパラダイムは、サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の自助 (Self Help) の徳に類似していると思われる。それは、一定の独善的で道徳的な過度の敬虔さと結びついた、自主、独立独行、自律、個人主義および自己実現を意味しているのである。

サッチャリズムの重々しい観念的レトリックや、その宣伝者たちの侵略的な隠喩にもかかわらず、企業文化は脆いものである。「企業」とその「文化」は、それらが宗教の中におけると同様に、社会および経営の中においてもデリケートなものなのである。企業文化は、状況の制御によっていとも簡単に抑制されることがあるので、それを実践する者にとっては、危険、圧迫、社会的無視、認識的な不調和や執拗な行動力の表現を意味する。

企業文化はまた、実行の精神、組織体の美学や活動の

様式をも含んでいる。これらは、反抗的な人のパトスと受動性、官僚的な機関、さらにいえば、古来からの主として二元的なイギリスの宗教的諸伝統とその儀式といった、慣習化し硬直化した組織的構造とは矛盾するのである。

企業文化の精神は、大いに自己に関わるものである。

そして吹聴されている富の再分配についての「浸透 (Trickle-down)」理論にもかかわらず、企業文化およびサッチャリズムは、人を動かす道徳的ビジョンを生むことができないことがわかったのである。「企業精神に富んだ個人」は、その孤独を和らげ、苛酷で原子化された社会的現実にあたり人間的性を与えるような現実の形態を求める。今や、有機的共同体の最後のなごりはほとんど失われており、戦後の福祉国家と結びついた代用的な中間組織の多くは、非情にも一掃されている。

実際において、サッチャー派の企業文化は、倫理的または内省的というよりも、偏狭に道徳主義的、情緒的となる傾向があった。したがって、犯罪、暴力、ポルノグラフィおよび性的過剰といった、社会文化的また人類

学的な諸問題は、本来ほとんど関心をもたれなかったと思われる。侵略的な経営施策が、広がってはいるがまだ解決されていない一般教育の危機に、取り組んできている。⁽³⁰⁾ 公的領域における社会倫理的な争点は、しだいに、政府の集権的なやり方や、社会統制および文化的商品化の私有化された商業手段に包摂されてきている。「活動的市民」は、絶えず成長する私的な「警備産業」が行う外的抑制によって統括されるアノミー的な不毛の社会にあつて、長く苦しい旅に直面している。「共有文化」の内省の本質および規範は、市場に向かい合つて動揺している。さらに、「社会」といったものは存在しない。個々の男性、女性そして家族が存在するのだ⁽³¹⁾という、サッチャーの最も有名な発言の中で表明された姿勢の漸進的な現実化に向かい合つて、動揺しているのである。

企業文化は、倫理的なものには関わらない。しかし、後述するように、過度に修辭的で、解放しえない伝統的な教会に直面したし、今なお直面している。伝統的な教会は、企業文化の言葉で言えば、慢性的に権能を剝奪されているのである。しかし、興味深いことに、広い意味

では、企業文化の形態もまた、独特の宗教的な形態を示しているのである。後に明らかにするように、それは、イギリスの伝統的宗教とは不似合いなものである。

三、葛藤する「諸文化」——サッチャー時代の宗教

社会学的には、戦後のイギリスの宗教は、ほとんど世俗化過程の経験のおよび理論的評価を通して説明されてきている。⁽³²⁾ イギリス（特にイングランド）の宗教は、移民にともなう民族の系列に沿つてますます分化してきている。⁽³³⁾ それにもかかわらず、さしあたり、キリスト教が（イングランドとスコットランドの二つの教会を通して）象徴的に国民の統合を表現し、「民俗」宗教 (J. H. Hahgood) や「潜在的」宗教 (E. Bailey) を組織化する重要な手段であることに変わりはない。

将来の進展のカギとなる要因は、多数派集団の相対的無関心と比較した場合に不釣り合いなほどの、移民に起源をもつ民族集団の熱狂的信仰にあると思われる。最近の調査では、主要なキリスト教諸教派が一般的に凋落す

る中で、カリスマ的な家庭教会運動 (house church movement) が発展している (ローマカトリック教団の場合に、最もそれが著しい) ことが明らかにされている。新宗教運動と教会外のキリスト教徒の革新団体の役割は、今までのところ、わりあい非政治的なものであるが、それについては、ここでは論じない。

サッチャー時代に宗教論争が公的に目立った例として、四つの場合をあげることができる。すなわち、①フオークランド戦争の慰霊祭の内容をめぐる保守党内閣とカンタベリー大主教ロナルド・ランシー (Ronald Rance) との対立 (一九八二年)、②保守派の中傷者によつて「マルクス主義者」の神学であると糾弾された、イギリス国教会の報告書『都市における信仰 (Faith in the City)』の出版 (一九八五年) と、その後の有名なダラムの主教デービッド・ジェンキンス博士 (Dr. David Jenkins) の政治的役割⁽³⁴⁾、③エジンバラにおけるスコットランド教会総会での、サッチャーのいわゆる「堤の上の説教」と呼ばれる演説 (一九八八年)、そして④サルマン・ルシディ (Salman Rushdie) の刺激的小説『悪魔の詩 (The Sat-

lantic Verses)』の出版(一九八九年)が、それである。

イギリス国教会の当局者が、一九八二年のフォークランド戦争後に功労者殊勲を行うことに對して乗り気ではなかったことが、公的領域においてイギリス国教会と国家の間に表面化してきた深刻な不和を明らかにする契機となった。皮肉にも、個人および家族の德行を神聖な義務とするという教会の役割が弱められてきたのであるが、その原因は、多分イギリス国教会の主教補佐機関である社会的責任委員会(Board for Social Responsibility)の社会的教えに最も明白にみられる集産主義的傾向だけではなく、E・R・ノーマン(E. R. Norman)が大いに影響力を及ぼした一九七八年の講演で提唱したような世界宗教としてのキリスト教の急激な非歴史化にあった。ノーマンが提唱したのは、キリスト教信仰が基本である「永遠の真理」へ回帰すべきこと、および、個人の精神的成長のための独自の教化に回帰すべきことであつた。この講演は、世俗的諸問題からまったく離れて、教会やキリスト教徒に向けて行われ、社会におけるキリスト教と宗教の本質と目的をめぐる顕著な分極化に貢献したのである。

「政治家としてと同様に、キリスト教徒として」語ってきたのである、と。この演説は、サッチャリズムの宗教的、道徳的ダイナミクスを理解する上で基本的なものである。

これらすべてのエピソードは、広範なキリスト教の内部で起こつたのであつて、当初は、自由主義的な知識階級の関心と利害を制御できなかつた。知識階級は、サッチャリズムによつてますます脅威にさらされ、社会的に無視されていた。メディアは、知識階級の人々を時代遅れの「サラリーマン」とか「おしゃべりな階級」だと宣伝したので、彼らは、自らを無能と感じていた。これらの攻撃に対する逆襲の試みがいくつかなされたが、特に「憲章」第八十八章に署名したロンドンの人々によつて試みられている。⁽³⁹⁾ こうした宗教的無関心は、突然、サルマン・ルシディの『悪魔の詩』の出版妨害と、ルシディに対するイランの勅令の発布によつて変化した。イギリスにおけるイスラム教の少数者集団の実状と潜在力が初めて明らかとなり、移民者とその利益を支持する中流階級の人々の自由主義的価値観を危険に陥らせることにな

る。

その後さらに、相対立する「集産主義者」の立場に立つた主教デービッド・シェパード(David Sheppard)の、『貧者への偏見(Bias to the Poor)』(一九八三年)と『都市における信仰』報告書(一九八五年)が、サッチャー率いる保守党が真の、個人主義的キリスト教とみたものと、潜在的な社会主義的ないし、集産主義的な聖職者の政治への干渉との間の懸隔を広げたのであつた。政治学的にみると、神の前での個人の道徳的自律という保守党の信条と、神学的集産主義者の「社会的信条」との間には、はなはだしい公的対立があり、その対立が、主要な諸教派(イギリス国教会、カトリックおよびメソジスト)の反発を、サッチャリズムと企業文化が示した活動領域に向けさせたことが明らかなのである。

サッチャー首相自らにとつてこれらの問題が重要であつたことは、一九八八年五月二十一日のエジンバラでのスコットランド教会総会における演説に示されている。⁽⁴⁰⁾ 英国の古参の政治的指導者たちは、「精神」——実際は個人の精神——の宗教的運命を真剣にとらえてきたし、

つたのである。宗教が、政治的、社会的日程にのぼつたのである。ユダヤ教、⁽⁴⁰⁾ イスラム教とヒンドゥー教といつた少数者集団が政治的に目立つてくるにつれて、彼らのサッチャリズムへの相対的追従も明らかになつてきた。

これらのエピソードのいずれも、総合的な経済的、社会的復興という展望によつて活気づけられる変容過程として理解される企業文化と、宗教が出会つたことによつて生じる根本的な争点を正確に示すものではない。サッチャリズムの開始と展開は、事実上、社会倫理のレベルで主要な教派に直面したのである。そして企業文化のもつ宗教的次元については、ほとんど検討されなかつたし、いまだに検討されずに残っているのである。⁽⁴¹⁾

四、宗教と企業文化——融合の仕方

多くの断片に分離した、サッチャリズムのアノミイ的傾向は、公的領域と私的領域の関係を定義し直すものであつた。教会やその他の宗教団体は、俗事に関して、より重要な公的役割を果たした。イギリス国教会に代表される宗教と企業文化の融合の仕方と、経営・商業領域に

おける融合の仕方を、それぞれ概括することが可能である。サッチャー時代の政策に対する、制度化されたキリスト教からの社会倫理的抗議と、企業文化の実現に必要なものに対する宗教的反応を示す現象とが区別されうるのは、この点なのである。

a イギリス国教会によるサッチャリズムの摂取

サッチャー時代のイギリス国教会は、一連の行動様式において、社会変化を限定づけるというよりは、むしろそれに従っていた。それで、イギリス国教会は、「企業文化」が課された間中、新右翼によって、依存と集産主義への時代錯誤的愛着に執着しているものとみなされた。それに対して、イギリス国教会は、サッチャー派の人々がイギリス国教会に個人の選択の自律性および家族の価値の支持者としての役割を課したことに抵抗したのであった。⁽⁴³⁾ サッチャー自身の見解は、まさに率直なものであった。すなわち、「国家がその産業、誠実、責任として正義によって際立つためには、国民は目的と倫理をもたなければならない。しかし、国家は、そうしたものを

を与えることはできない。目的と倫理は、信仰の教えによつてのみ獲得できるのである。したがって、教会は、そうした仕事のための道具でなければならない」と。

しかしながら、皮肉にも、教会はふたたび、ノーマンの仮説の前提条件を満たしてきていると思われる。その仮説にしたがえば、いかなる時代の一般通念も、教会に編入された後にエリートの知的仲間集団と同一の見解を抱く主教によって「神学」へと変質させられる。つけ加えれば、グラムシ (Antonio Gramsci) のいう「有機的知識人 (organic intellectual)」の *kyōgi* にアンチテーゼとして、主教は知識を吸収し、それらをイギリス国教会の命令として「下級の聖職者」に伝えるのである。「下級の聖職者」は、次は、民衆レベルで平信徒に向かい合う。管理政策の摂取とその下方への浸透という循環は、結果として、主教のイデオロギー的支配やかからの「仲間文化」と、特権をもたず社会経済的現実の中に住む教区の牧師の小売店的な見解の間に、不調和を生み出す。⁽⁴⁵⁾

しかし、新たに任命されたカンタベリー大主教のキャリー博士は、教会的な「ネオ・フォーダイズム

(neo-Fordism)」となるような経営活動の遂行と評価計画を提唱してきた。⁽⁴⁶⁾ 正確にいえば、イギリス国教会がこうしたサッチャリズムの特徴を自分のものとしたのは、政治的信条としてのサッチャリズムがつまづいて、全体にわたる指導権を失った歴史的時点においてであった。的確に理解された企業文化は、サッチャー派のライン・マネジメントに関するビジョンとは異なって、制度化された教会にはほとんど相いれないままなのである。

b 企業文化の宗教——不可欠の宗教性?

「企業文化」の固有の宗教性という点からみると、制度化された宗教形態とそれとの間の衝突は、いつそう複雑である。たとえば「原因に在る (at cause)」概念や「結果に在る (at effect)」概念にみられるような、ニューエイジ的、企業融合的および折衷的企業宗教の主要なカテゴリーは、英国の制度的宗教の内的要求や「依存的」で「本質的」な牧師の内定論理と衝突する。後者は、依存的ないし「結果に在る」ことを、キリスト教の主要な型として据えるのである。⁽⁴⁸⁾ サッチャー政権が最盛期に達した

一九八九年末にランカスターで開催された「ジョイニン・グ・フォース・スピリチュアリティ・イン・ビジネス (Joining Forces Spirituality in Business)」国際会議には、マネジメント・デベロップメントに携わっている二百人以上のニューエイジの実践者が集った。⁽⁴⁹⁾ その結果は、時代を画するような記念すべきものであった。この折衷的で変化に富む宗教性を統一するための議論の中で、キーワードが明確にされた。すなわち、「主張」、「具体化」、「循環過程」、「危機」、「エネルギー」、「脱出」、「インカーネーション」、「カルマ」、「情愛」、「魔術」、「危険」、「精神性」、「構想」、「闘士」などの用語だが、これらの、一見脈絡のない用語は、共通に繰り返し発生する諸特徴を示している。諸個人の自己実現をめぐるこれらの概念は、英国の制度化された男性的な宗教文化とは異なったやり方で機能した。

企業文化の宗教にみられる、有能で情緒的な自己の再神話化は、より大きなエネルギーと能率の追求をめぐって行われる。自己認識と実践の拡大化についての實用主義的、内在論的な倫理は、超越的なものに直面すると、

伝統的な犠牲と依存の涵養と矛盾する。さらに探究すべき多くの興味深い問題が、この時点で生じている。

五、結論——「資本主義の新たな精神」に向けて⁽⁵⁰⁾

企業文化のまさに核心部分に見出されるカリスマ的人物の意識を追究すると、そのタイプは、ウェーバー流のカリスマ的人格を思い起こさせるものである。その人物は、制度化された官僚的権力構造を脅威にさらすような、独創的な人である。企業文化は、ある意味では、後期資本主義あるいは先進資本主義社会のすたれたけた合理性を非日常化し、カリスマを再発見しようとする試みであるといえる。前近代の文化的遺風、現代化傾向、ポスト近代的要因が窮屈に共存する複雑なイギリス社会の状況を考えると、色褪せ弱体化しているイギリスの「ポストキリスト教的」な宗教文化の遺物（イギリス国教会）は、ニューエイジの精神とそれに伴う宗教性の形態と折り合うことはほとんどできないだろう。新たな宗教が、先進的な資本主義社会の宗教文化的要請に込められているのに比

べて、制度化されたキリスト教各派や十分制度化された非キリスト教的諸宗教は、現代後期とポスト世俗化の危機に鋭く直面している。宗教の晩年⁽⁵¹⁾において、倒木の朽ちた幹に生殖する菌のように、新たな形態の宗教が生ずるであろう。あるいは、伝統主義者にとってはそう思われるであろう。

逆説的かつ反語的なことであるが、企業文化が行う非日常化は、「選択」と「自由」の名の下に、新たな秩序を押しつけようとするものであった。⁽⁵²⁾イギリスの企業文化は、皮肉にも、その現実化のためにサッチャー派の経済的、社会的規律という世俗的モンタノス主義（a social Montanism）を内に含んだ、予想上のヴィジョンだったのである。

企業文化は、本来、特定の政治や政党に拘束されるものではないとすることには、なお論議の余地がある。それは、政治的には価値自由なものであり、むしろ革新者のカリスマ的機能に関係するものである。しかし、企業文化の実現は、権能の社会的分配に密接に関連している。ものごとを起こす技術は、多くの情況下で評価される希

有な人間の特質である。⁽⁵³⁾伝統的宗教内部での「企業文化」の宗教的再機能化は、ありうべきことであり、宗教的専従者とこれらの組織に対する目立った挑戦である。

企業文化は、サッチャリズムと同様に、イギリス社会の中で普遍的地位につくことはできなかった。そのため、今や企業文化は、社会層およびその下位文化の通常のパターンにふたたび一体化されつつある。企業文化は、今や、イギリス社会において適所を占めているといえる。イギリス社会では、人口の大部分は、実際には、不公平に分配されたごくわずかな知的資本および「文化資本」から排除されたままである。「宗教」およびより生命力のある現代宗教は、ほとんどの場合、社会的下層と人種の下位集団の中にある。人口の実質的部分は、「脱文化化」、社会的原子化過程、増大する犯罪行為、伝統的家族構造の崩壊、そして個人と社会階級間のコミュニケーション能力の喪失を経験しつつある。

「社会主義の終焉」によって、今や、少数者の正当な要求を組織的に的確に表現しうるイデオロギーは存在しなくなった。耳ざわりな（人種的、性的および生態学的）

圧力団体は、社会的コミュニケーションの主要なチャンネルを獲得してきた。そして、これらは、疎外された下層階級の抑圧されたフラストレーションと潜在的な（現実の）侵害からの市民社会の隔たりを促進している。宗教に対する挑戦は、今までのところあまり知られていない。

歴史的にみれば、サッチャー政権とその宗教は、ほとんど失敗した世俗的終末論といったようなバトスを発散させている。現実の「企業文化」は、周知的な概念にとどまった。「企業」は、緊張に満ちており、規範と正常性から逸脱している。その擁護者は、概して、宗教と社会における例外的なエリートたちである。企業文化は、伝統宗教だけがやつと与えることができる社会学的資源を求める。すなわち、現代社会において、サッチャリズム（そして今やメジャリズム）が容認していたものと現在容認しているものをはるかに越えた、教育的資源や文化的資源を求めるのである。

制度化した伝統的な英国の宗教は、回復の場、依存の聖域として理解されるべきである。こうした宗教は、矛

盾を含んでいるが、それらの矛盾は、情性や、変化に対する抵抗という致命的な効果的武器によって弁護されるのである。したがって、それが、全体としての現代のイギリス社会の要求や、個別的な「企業文化」の要求に應えることは難しい。それでも、企業文化は、根本主義が徹底的に自由主義的な世俗化かといった、相互に排他的な二者択一とは対照的に、創造的かつ急進的な革新の間物を与えうるのである。企業文化は、おそらく、「敬神が少数派の趣味とならないように、宗教的クラブの外で神を追求する」⁽⁵⁴⁾ための基礎となりうるであろう。そこにおいて、社会学者と宗教研究者の仕事が、社会的勢力の領域に収斂するのである。そうした領域は、学際的研究に基づいてのみ、十分に解釈できるであろう。そして、そのとき、新たな資本主義の精神といったものの宗教的局面が、より完全に説明されるのである。

註

- (1) 筆者が、一九八九から九〇年にかけて、ランカスター大学宗教研究学部で受けたレキット研究奨学金を提供してくれたクリスタンダム・トラストに感謝したい。プロジェクト「宗教と資本主義の再興」で同僚とたたか

わした論議は、実り多い体験であった。特に、エイドリアン・カニングハム(Adrian Cunningham)、ポール・ヒールズ(Paul Heelas)、ポール・モリス(Paul Morris)の各氏に謝意を表すものである。また、本稿作成の初期の段階でコメントをくださったウォーウィック大学のジェームス・ベックフォード(James Beckett)氏に感謝したい。

- (2) Mrs. Margaret Thatcher, *Sunday Times*, 7 May 1988.
(3) 一九八四年六月十八日のシティ・ユニバーシティ・ビジネス・スクール(City University Business School)で行われた、当時の大蔵大臣ナイジェル・ローソン氏の講演、「英国の実験」のタイトルから借用した。
(4) 一九八八年一月十九日に、カールトン・クラブの政策研究センターを代表して行われたナイジェル・ローソン氏の演説、「新生英国、アトリーからサッチャーへの理念の潮流」から借用した。
(5) 経済政策の変更、サッチャーの社会改革の前提条件については、Samuel Brittain, "The Thatcher Government's Economic Policy," in D. Davanagh and A. Seldon (eds.) *The Thatcher Effect*, Oxford Clarendon Press, 1989, pp.1-37. Patrick Munford, "Mrs Thatcher's Economic Reform Programme-Past Present and Future," in R. Skidelsky (ed.), *Thatcherism, London, Chitto and Windus*, 1988, pp.93-106. 参照。すべた十分な概観については、Peter Jenkins, *Mrs Thatcher's Revolution*;

- The Ending of the Socialist Era*, London, Pan, 1987/9.
Dennis Kavanagh, *Thatcherism and British Politics: The End of Consensus*, Oxford, OUP, 1987/9. 参照。標準的な政治伝記については、Hugo Young, *One of Us: A Biography of Margaret Thatcher*, London, Macmillan, 1989. 参照。
(6) 保守党総会演説。於クック。一九三八年十月十四日、一六七頁。

- (7) 英国の状況の下の「宗教と資本主義の相互の復活」が世界的規模で生じていることを証拠は、曖昧かい分裂している。後者に聞けば、M. Featherstone(ed.), *Global Culture Nationalism, Globalisation and Modernity*, London, Sage Publications, 1990. S. Gill and D. Law (eds.), *The Global Political Economy Perspectives, Problems and Policies*, London, Harvester, 1988. R. Peet, *Global Capitalism Theories of Societal Development*, London, Poutledge, 1991. L. Sklair, *Sociology of the Global System: Social Changes in Global Perspective*, London, Harvester, 1991. W. H. Swatos Jr. (ed.), *Religious Politics in Global and Comparative Perspective*, New York, Greenwood Press, 1989. R. H. Robert's (ed.), *Religion and Contemporary Capitalism: A World Survey*, London, Routledge/HarperCollins, forthcoming (introduction). 参照。
(8) David Martin, "The Churches: Pink Bishops and the

- Iron Lady," in Kavanagh and Seldon, 1989, p.330. サッチャー時代における「宗教の見かけ上の「復活」の不明瞭な面は、ピーター・ブライアリーによって示された証拠に照らして倍加せられる。Peter Brierley, *Christian England What the English Church Survey Reveals*, London, MARC Europe, 1991. 参照。
(9) Text of press release 27, February 1990, p.1.
(10) *Ibid*.

- (11) Paul Morris, "Freeing the Spirit of Enterprise: the genesis and development of the concept of enterprise culture," Raman Selden, "The Rhetoric of Enterprise," both in Russell Keat and Nicholas Abercrombie (eds.) *Enterprise Culture*, London, Routledge, 1991. 参照。阿論文では、ほとんどの表や図に資料に依拠している。サッチャー女史の講演については、Alastair B. Cooke 編のものに依るのが有用である。

- (12) Jonathan Raban, *God, Man and Mrs Thatcher*, London, Chatto and Windus, 1989. 同書は、サッチャリズムの宗教性を理解する上で非常に重要なテキストである。

- (13) ヨーロッパにおいては現在強力ではあるが、立法府に代表を出していない政府をもたらず単純多数選挙制度に基づいて確保された。

- (14) Kavanagh, 1987/88, p.281. 最終章「英国政治の再整理」は、有益な背景を提供している。

- (15) 一九九〇年十一月二十六日付け「インディペンデント

【The Independent】社説。

- (16) とりわけ、ヨーロッパ統合についての従来の党方針からの最初の離脱について、一九九一年三月十一日のボンでの彼の講演参照。
- (17) 英国経済の没落については、M. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit*, Cambridge, CUP, 1981. 参照。
- (18) こうした論議の役割は、サッチャー派の企業文化の設定にとつて根本的なものであった。従って、鉄道旅行者は、「つねに」「顧客」と呼ばれ、学生は教育を「消費する」等々である。人々は、彼らに文化的に再確認する、ことを認める新たな陳腐な文句の使い方を学ばなければならなかった。
- (19) フライアン・ウォールデンとのテレビインタビュー、一九八九年十月二十九日。David Cox (ed.), *The Walden Interviews*, London, LWTBoxtree, 1990, p.41.
- (20) *Thatcherism and British Politics: The End of Consensus?*, Oxford, OUP, 1987(1), 1988 (2), pp.9ff. また、左翼の側からは、Stuart Hall and Martin Jacques, *The Politics of Thatcherism*, London, Lawrence and Wishart, 1983. Bob Jessop, Kevin Bonnett, Simon Bromley and Tom Ling, *Thatcherism: A Tale of Two Nations*, London, Polity Press, 1988. を参照。新興の自由民主派の側からは、David Marquand, *The Unprincipled Society: New Demands and Old Politics*, London, Cape, 1988. を参照。
- (21) 有益な入門書として、David G. Green, *The New Right: The Counter Revolution in Political, Economic and Social Thought*, London, Harvester, 1987. を参照。R. H. トーニーから受け継がれた、平等主義的合意の崩壊についての、独創性に富んだテキストとして、Keith Joseph and Jonathan Sumption, *Equality*, London, John Murray, 1979. があつた。第三章の副題「貧困は不自由ではなく」は、示唆に富んでいる。
- (22) これらの組織に関する有用な資料としては、Arthur Selton, *Capitalism*, Oxford, Blackwell, 1990, pp.404-6. 参照。
- (23) サッチャー女史は、一九七八年五月六日のボーグループ (the Bow Group) に対する演説の中で、国家の役割についての彼女の理解を明らかにしている。A. B. Cooke (ed.), *Margaret Thatcher: The Revival of British Speeches on Home and European Affairs, 1975-1988*, London, Aurum, 1989, p.76.
- (24) 複雑な論議による失敗は、最も悪名高く Digby Anderson (ed.), *The Kindness that Kills*, 1984. にあるキリスト教徒の用語の中に表現された。クリスチャン・サチャリズムの主要な考案者は、フライアン・クリンフィス教授である。Brian Griffith, *Morality and the Market Place*, London, Hodder and Stoughton, 1982. は大いに影響力を及ぼした。
- (25) Raban, 1989, p.27.

- (26) 保守党員 R・A・バトラーとヒュー・ゲーツケルから引き出された政策のおおらかな総会、労働党と保守党が一九七〇年代の中で離れざるをえなかった領域。
- (27) ランカスター大学における一九八九年十月の「企業文化の価値」コンフェレンスでの講演「企業は立ち直った」を参照 (Keat and Abernombie, 1991, p.6).
- (28) Samuel Smiles, *Self Help, with illustrations of character and conduct*, London, Murray, 1863. の著者である。非国教徒の良心の主要な考案者であるサミュエル・スミルズの考えに対する関心の復活があつた。
- (29) 次のものを参照。Anne Eyre, "Faith, Charity and the Market," in Peter Gee and John Fulton (eds.), *Religion and Power Decline and Growth, Sociological Analysis of Religion in Britain, Poland and the Americas*, London, BSA, 1991, pp.42-51. Frank Field, "How Have Britain's Poor Fared?", in Michael Alison and David L. Edwards (eds.), *Christianity and Conservatism: Are Christianity and Conservatism Compatible?*, London, Hodder and Stoughton, 1990, pp. 242-62.
- (30) 英国の教育制度のパブリックセクターへの「企業」の押しつけは、完全な企業文化を設定するためにとられた政策措置の中で非常に重要な要因となつていった。
- (31) 雑誌「女性自身 (Woman Own)」のインタビューの中で、「権威主義的人民党員」としての談話。サッチャー女史の最も有効なコミュニケーションの大部分は、人気のあ
- (32) たとえば、フライアン・ウィルソン (Bryan Wilson) とデーヴィッド・マーティン (David Martin) の研究および世俗化をめぐる長い間の論議が、四半世紀の間英国の宗教社会学を支配した。関係文献は多数ある。James Beckett, *Religion in Advanced Industrial Society*, London, Unwin Hyman, 1989. などの論争に対する最も最近の主要なイングリランドの理論的貢献をしている。
- (33) 英国の宗教構成についての最も新しい記述は、P. Badham (ed.), *Religion State and Modern Society in Britain*, Lampeter, Edward Mellen Press, 1989. に見出す。また、Grace Davie, "Believing without Belonging is this the future of religion in Britain?", CISR paper, Helsinki, 1989. を参照。
- (34) *Faith in the City: A Call for Action by Church and Nation*, London, Church House Publishing, 1985.
- (35) エドワード・ベリーは、筆者にサービスの形態が事実上一九四五第二次世界大戦の終わりに使用されたそれに非常に類似していることを指摘している。
- (36) ノーマンは、「救世主の教えは、明らかに社会的道徳よりも個人的なそれを述べている」と論じた。そして、現代のキリスト教は、「かつて道徳的関心のための無気

力化しかつ世俗化された青写真にとって永久普遍の真理のユニークな啓示であったもの」と「個人の精神性の修練よりも社会変化が優位するこの主張」を減少せしめていふ。Christianity and the World Order, OUP, 1979, p.80.

(37) もくもくの言葉は、Raban, 1989, pp.7-20. 参照。

(38) Raban, 1989, p.9.

(39) チェコソバキヤ憲章第七十七章との暗黙の比較が熟議された。

(40) サッチャー女史のユダヤ教への個人的重視は、当時の英国ユダヤ人社会の宗教上の長、イマニエル・ジャコボビッチ卿(Sir Immanuel Jakobovits)によつて全部もとに戻された。彼は「サッチャーイズムの個人的および家族的道徳観を是認した。

(41) 多くの公的活動が、アジアの企業の経済的成功で構成されている。彼らのあるものは、商業活動の「サッチャー化」に指導的役割を演じた。Kim Knott, "Hindu Communities in Britain" and Jorgen S. Nielson, "Islamic Communities in Britain," in Badham, 1989, M. S. Raza, Islam in Britain Past, Present and Future, Leicester, Volcano Press, 1991. を参照。

(42) しかしながら、次の関連部分に参照。P. Heelas and P. Morris (eds.), The Values of the Enterprise Culture, London, HarperCollins Academic, 1991.

(43) 一九七八年三月三十日のセントローレンスユダヤ人

街における講演。A.B. Cooke(ed.), 1989, p.68.

(44) A. B. Cooke (ed.), 1989, p.68.

(45) 彼の権威ある著書 Church and Society in England 1770-1970: A Historical Study, Oxford, OUP, 1976. を参照。特に結びの要約 pp.473-4 を見よ。

(46) こうした教会管理は「ポスト・フォーディズム」なのであろうか。或いは、ミッシェル・アグリエッタが論ずるやうに、フォーディズムを「ネオフォーディズム」に強化するものであろうか。後者の強調は「現実化」といふよりも統制にもある。Paul Bageulley, "Post-Fordism and Enterprise Culture Flexibility, Autonomy and Changes in Economic Organisation," in Keat and Abercrombie, 1991, p.153. を参照。

(47) 「企業の宗教」は「文脈上まったく別な方法で新世代の論議と実践を利用する。詳細な概説については、Paul Heelas, "Cults for Capitalism Self religions, Magic and the Empowerment of Business," in Gee and Fulton, 1991, pp.27-41. を参照。

(48) R. H. Roberts, "Lord, Bondsman, and Churchman: Integrity, Identity and Power in Anglicanism," in C. Gunton and D. W. Hardy (eds.), On Being the Church Essays on the Christian Community, Edinburgh, T. & Clark, 1989, pp.156-224.

(49) 筆者が、一九九〇年一月にふたたび何人かと会った際、彼らの活動の中心が企業の宗教性の賛美と個人意識の効

用から「破産相談」に移行していったことは注目に値する。

(50) これに関連する文献は限らないが、サッチャー派の「キヤピタリズムの復活」後の研究は知られていない。初期の概説として、G. Marshall, In Search of the Spirit of Capitalism: An Essay on Max Weber's Protestant ethic thesis, London, Hutchinson, 1982. を参照。

(51) この示唆に富んだ概念は、T. W. エリオット追悼講演でも、George Steiner, In Bluebeard's Castle: Some Notes Towards the Re-definition of Culture, London, Faber, 1971. から引用されている。

(52) 自由とこの概念の明白な限界は、K.D. Ewing and C. A. Gearty (ed.), Freedom under Thatcher: Civil Liberties in Modern Britain, Oxford, Clarendon Press, 1990. の中で探究されている。

(53) 前ローリー(Imperial Chemical Industries Ltd)専務取締役ジョン・ノーバー・シモンズ卿は、その著書 Making it Happen, London, Collins, 1988. にジョン卿が驚くほどの英国(時として外国)の会社を訪問したBBCテレビのシリーズ「紛争調停人」で、予期しない大成功を経験してきている。

管理の創造的開花は、それ自体を魔法や占星術から宝玉にまでわたる文化的遺物を利用する「まったく新しい形式の書物の中で描写してきている」。たとえば、W. Roberts, The Management Secrets of Attila the Hun, London, Bantam Press, 1989.

(54) Robert Towler, The Fate of the Anglican Clergy, London, Macmillan, 1979, pp.204-5.

(セント・アンドリュース大学教授)
(ふじたひさのり・創価大学助教授)